

前売開始 9月5日(土)

●チケット料金(全席自由・税込)

【作品上映+展示】

●前売・当日 1本＝1,500円(上映毎に入替)

●セット券＝2本 2,800円 3本 3,900円 4本 4,800円

※セット券は前売のみ取扱い(枚数限定)。

※シンポジウム、レクチャーはセット券の対象外です。

【レクチャーまたはシンポジウム+展示】

●前売・当日＝1,000円

【対談】

●前売・当日＝1,000円

【ワーク・イン・プログレス公演：
タニノとドワフ達によるカントールに捧げるオマージュ】

●前売＝2,000円 ●当日＝2,500円

●25歳以下＝1,500円 ●高校生割引＝1,000円

※25歳以下と高校生割引チケットは前売のみ取扱い(枚数限定・要証明書)。

※障害をお持ちの方：割引料金にてご観劇いただけます。

詳しくは劇場ボックスオフィスまで。

【ワークショップ】

●参加料 1セッション＝2,000円

チケット取扱・お問合せ

東京芸術劇場ボックスオフィス

0570-010-296(休館日を除く10～19時)

[http://www.geigeki.jp/t/\(PC\)](http://www.geigeki.jp/t/(PC))

[http://www.geigeki.jp/i/t/\(携帯\)](http://www.geigeki.jp/i/t/(携帯))

※未就学児はご入場いただけません。

※託児サービスのご案内(要予約)：東京芸術劇場託児施設「だっこルーム」

お問合せ：03-3981-7003(平日10:00～17:00)

主催 東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都/アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

共催 ポーランド演劇文化センター
Instytut Polskiej Kultury

後援 ポーランド共和国大使館

協力 cricoteka

助成 文化庁 平成27年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

企画監修 鴻英良

制作進行 昌由紀 小野塚央(ワーク・イン・プログレス)

コーディネート Change Performing Arts

写真提供 Change Performing Arts / Cricoteka

企画制作 東京芸術劇場

●フェスティバル/トーキョー15

タデウシュ・カントール生誕100年記念

「ポーランド演劇の
現在形」

巨匠カントール、グロトフスキの2人を起点に、
多彩なゲストによるトーク、映像上映や展示により
同時代のポーランド演劇の見取り図を描く。

詳細は、F/T公式HPにて後日発表。

2015年(平成27年)

11月24日(火)▶29日(日)

会場 東京芸術劇場 アトリエース

お問合せ フェスティバル/トーキョー Tel.03-5961-5202

主催 フェスティバル/トーキョー実行委員会

豊島区/公益財団法人としま未来文化財団/

NPO法人アートネットワーク・ジャパン、

アーツカウンシル東京・東京芸術劇場

(公益財団法人東京都歴史文化財団)

文化庁 平成27年度文化庁文化芸術による地域活性化・

国際発信推進事業

(池袋/としま/東京アーツプロジェクト事業、としま国際アートフェスティバル事業)

FT Festival/Tokyo

25th
Anniversary
東京
芸術
劇場

〒171-0021 東京都
豊島区西池袋1-8-1

TEL:03-5391-2111

<アクセス> JR.東京メトロ、東

武東上線、西武池袋線池袋駅

西口より徒歩2分。池袋駅地下

通路の2b出口で直結しています。



カントール生誕100年記念

20世紀を代表し、世界に衝撃を与えたポーランドの演出家、タデウシュ・カントール

「戦争と革命の時代」と言われる20世紀に
カントールが現実への応答として作り上げた作品群は芸術という愉楽とともに

21世紀の門口に立つわれわれを新たな思索へと向かわせる

カントール生誕100年にあたり、作品の映像、自筆ドローイング

タニノクロウによるカントールへのオマージュ

レクチャー、シンポジウムなど、あらゆる角度からカントールを再検討する

2015年

(平成27年)

10+12月

Photo by Jacek Maria Stoklosa.
This picture is a part of Tadeusz Kantor exhibition at Cricoteka.

25th Anniversary 東京芸術劇場
Tokyo Metropolitan Theatre

今年、20世紀を代表する世界的演出家のひとり、タデウシュ・カントール（Tadeusz Kantor）の生誕100年に当たる。その機会に、この芸術家の足跡を辿り直しながら、この芸術家がわれわれに何を問いかけ、何をもたらそうとしていたのかを考えようとするために、われわれは映像資料、ドローイング展示、あるいは、カントールに関する思索などとともに、カントールについて回顧しようと思うのである。「第1次世界大戦の最中に生まれ、第2次世界大戦の最中に芸術家になった」と自らが語るカントールは、まさに、「戦争

と革命の時代」と言われる20世紀の芸術家であった。そのカントールが、現実への応答として作り上げていった作品群は、芸術という愉楽とともに、われわれを、現実の問題を思索する道へと誘うのである。ここでは、ポーランドの歴史の苦悩が、われわれの歴史をも浮かび上がらせるであろう。21世紀の門口に立つわれわれはいまどのような現実と直面しているのか。そのことを改めて考えさせるような作品群を見つづける。この企画展において、われわれは愉楽とともに新たな思索へと向かおうとする。……企画監修：鴻英良

10月10日【レクチャー】 カントールと演劇の二十世紀

講師＝鴻英良
カントール作品に触れつつ、カントールの芸術理念、その世界的な意味について考察する。彼が20世紀の現実をどのように分析し、それにどのように応答したのか、そうした彼の試みが21世紀を生きるわれわれに何を語りかけているのか、それが問題だ。
鴻英良（おおとり・ひでなが）…演劇批評家。1948年生まれ。国際演劇祭ラオコオン（カンフナーゲル、ハンプルグ）、ウォーカー・アート・センター（ミネアポリス）グローバル委員、京都舞台芸術センター副所長などを歴任。著書に、『二十世紀劇場：歴史としての芸術と世界』（朝日新聞社）、訳書に、カントール『芸術家よ、くたばれ!』（作品社）、タルコフスキー『映像のポエジア』（キネマ旬報社）、カバコフ『イリヤ・カバコフ自伝』（みすず書房）など。

10月12日【シンポジウム】 カントールの衝撃

スピーカー＝タニノクロウ＋清水信臣＋アンナ・R・ブジンスカ＋レフ・スタングレト 司会＝鴻英良
演劇との出会いの初期にカントールに衝撃を受け、今回カントールに捧げるエチュードを創作する演出家、タニノクロウ。ポーランドとの共同作業を続ける演出家、清水信臣。ポーランド現代演劇の研究者、アンナ・R・ブジンスカ。元Teatr Cricot²（カントールの主宰した劇団）の俳優、レフ・スタングレト。4人が、それぞれの視点からカントール、そしてカントール以後に迫る。
タニノクロウ…劇作・演出家。2000年、昭和大学医学部在学中に庭劇団ベニノを旗揚げ、以降全作品の脚本・演出を手がける。「笑顔の砦」（2007）、「星影のJr.」（2008）が岸田國土戯曲賞最終候補。2009年より毎年、欧州とアメリカの国際演劇祭に招聘される。本年3月ドイツ・クレーフルトにて新作「水の檻」を発表。また、本年8月に新作「地獄谷温泉 無明ノ宿」を発表。
清水信臣（しみず・しんじん）…演出家、劇団解体社主宰。「身体演劇」を標榜し、演劇における「身体」と、権力/暴力をめぐる問題系に取り組む。近年はグローバル体制下における「生政治的身体表象」を考察する「Dream Regime ― 夢の体制」で様々な国との共同製作を続ける。ポーランドとは、「カントール以後」を代表するテアトル・シネマとコラボレーション。
アンナ・R・ブジンスカ Anna R.Burzyńska…ポーランドの演劇研究者、批評家。クラクフのヤギェウォ大学演劇学部准教授（主分野は19世紀と20世紀のポーランドとドイツの演劇）。リミニ・プロトコル、アダム・マコービッツ協会、イェジー・グロトフスキ研究所、クリコテカなど、さまざまな劇団や組織との共同作業にかかわっている。
レフ・スタングレト Lech Stangret…ポーランドの美術家、批評家。タデウシュ・カントール財団ディレクター。Teatr Cricot²の元俳優で、2004年まで、クリコテカ（カントール作品の記録を目的とする博物館）の副所長を務めた。カントールに関する著作多数。

ヴィエロポーレ、ヴィエロポーレ

1984年 ポーランドテレビ制作 字幕翻訳＝津田晃岐
上映時間＝86分
1980年、フィレンツェ初演。第一次世界大戦下、オーストリア軍に徴集された7人の新兵たち、そして、カントール本人の家族、親族たちの物語が交錯する。ポーランドの歴史と運命が浮き彫りにされてくる。ヴィエロポーレはカントールの生まれた村の名前である。タイトルの持つ鏡像的效果、反復。

私は二度とここには戻らない

1990年 ポーランドテレビ制作 字幕翻訳＝津田晃岐
上映時間＝81分
1988年、ミラノ初演。タイトルは、ガス室へと連れられて行く絶滅収容所のユダヤ人たちが、去り際に、まだ殺されないでいる仲間たちに語った言葉である。殺された人たちの亡霊が、宿屋にやってくる。われわれはここで対面しなければならない。20世紀に何が起ったのかを。「ガス室への行進」とともに歴史が蘇る。

愛と死の機械

1987年 Change Performing Arts制作
字幕翻訳＝荒川いづみ 上映時間＝34分
カントールは、1938年、クラクフ芸術アカデミーの学生の時、メーテルリンクの象徴主義的作品『タンタジールの死』を、構成主義的、パウハウスの方法とぶつけて上演した。それから50余年、この舞台を再構築し、「演劇的機械」のなかに新たにはめ込み、それをクリコターージュと呼んだ。1987年、カッセルのドキュメンタにて初演。

【上映作品】

作・演出＝タデウシュ・カントール、出演＝Teatr Cricot²
いずれも日本語字幕付き
協力＝京都市立芸術大学

死の教室

1976-1990年 Change Performing Arts制作
字幕翻訳＝荒川いづみ 朗読テキスト翻訳＝鴻英良
上映時間＝90分
1975年11月15日、クラクフのクシシュトフォリ・ギャラリーにて初演。奇怪な死を巡るアラベスク。古びた教室の机の周辺で、狂おしくも演じなおされ、反復される絶望と歓喜。愚行の輝かしさ。こうして死を現前化させる空間が奇妙な透明感に満ちてくる。これは死の演劇。日本ではアンジェイ・ワイダ監督による劇場映画版が公開されているが、これは初演の数ヵ月後の希少な映像を中心に世界各地の上演映像を、カントールのテキストを最も忠実に再現することを目的に構成し、日本語朗読を加えた特別版。

くたばれ! 芸術家

1986年 ポーランドテレビ制作 上映時間＝77分
1985年、ニュルンベルグ初演。ヴァイト・ストシュ、ニュルンベルグの彫刻家、クラクフの教会の祭壇を作った彼は、望郷の念抑えがたく、故郷に帰った時、財政法の罪で頬に釘を打ち込まれた。「芸術家よ、くたばれ!」。芸術家に向けられた死の命令。死者は墓の向こうに旅立っていく。ここで試みられるのは、生と死を引き合わせるという不可能の企てである。

2015年(平成27) 10月8日(木)▶18日(日)

【作品上映＋展示＋レクチャー＋シンポジウム】

◎会場＝東京芸術劇場 シアター・イースト

死＝死の教室 <＝くたばれ! 芸術家 >＝ヴィエロポーレ、ヴィエロポーレ

私＝私は二度とここには戻らない 愛＝愛と死の機械 シ＝シンポジウム レ＝レクチャー

2015年	10/8	10/9	10/10	10/11	10/12	10/13	10/14	10/15	10/16	10/17	10/18
	木	金	土	日	月祝	火	水	木	金	土	日
13:30			>	私	<					<	死+愛
16:15			レ	死	シ					>	
19:00	死+愛	<+愛	死			死+愛	>+愛	私+愛	死+愛	私	

※開場は開演30分前。
※開場時より終演後30分まで、会場およびロビーのドローイング・写真の展示をご覧いただけます。
※各上映、シンポジウム、レクチャーは入替制となります。
※「愛と死の機械」は平日及び最終日の特典上映となりますので、料金は1本分と同一料金となります。

【展示】 美術家としても知られたカントール自筆のドローイング20点、スケッチ写真など約20点、カントール来日時に写真家・宮本隆司が撮影した舞台稽古写真約15点など、貴重な資料を一挙公開。



死の教室



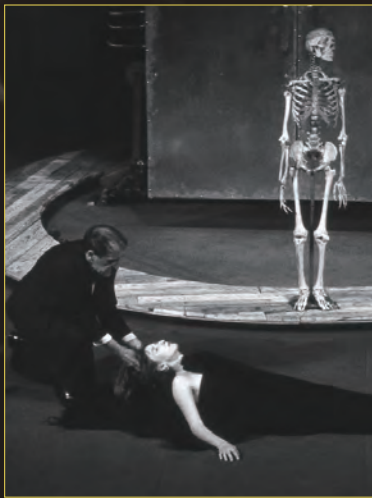
くたばれ! 芸術家



ヴィエロポーレ、ヴィエロポーレ



私は二度とここには戻らない



愛と死の機械

2015年(平成27年) 12月5日(土)

【鈴木忠志×鴻英良対談】

カントールと現代世界演劇の布置

——利賀フェスティバルはいかに構想されたか

◎開演＝14:00／開場＝13:30 ◎会場＝東京芸術劇場 シンフォニー・スペース
日本で最初の国際演劇祭、利賀フェスティバルを1982年に実現させた演出家の鈴木忠志は、そのプログラム、輝ける星々の星座の中に、寺山修司、ロバート・ウィルソンらとともに、カントールの「死の教室」を配置した。なぜカントールだったのか、その意味について鴻英良が鈴木忠志に聞く。
鈴木忠志（すずき・ただし）…劇団 SCOT 演出家。1966年、早稲田大学のそばに早稲田小劇場を建設、同名の劇団として活動を始める。76年に富山県利賀村に拠点を移し、84年、SCOTに改名。独自のスズキ・トレーニング・メソッドから生み出される舞台は世界各地で上演され、大きな影響を与えている。主な作品に「リア王」、「世界の果てからこんにちは」、「トロイアの女」ほか。82年より毎年、世界演劇祭「利賀フェスティバル」を開催し、その第1回で「死の教室」を招いた。

12月17日(木)▶24日(木)

【タニノクロウ作・演出ワーク・イン・プログレス公演】

タニノとドワーフ達による カントールに捧げるオマージュ

◎会場＝東京芸術劇場 アトリエ・イースト

2015年	12/17	12/18	12/19	12/20	12/21	12/22	12/23	12/24
	木	金	土	日	月	火	水祝	木
13:00			●				●	
15:00				●				●
18:00			●				●	
19:00	●	●			●	●		

※開場は開演の30分前。

作・演出＝タニノクロウ
オブジェ＝小竹信節
出演＝マメ山田ほか
それまで絵画と医学しか知らなかった私の、海外演劇との初めての遭遇はタデウシュ・カントールでした。出会いは偶然で退屈な話だけれども、彼の「死の教室」という作品に強い衝撃を受けました。
作品を作る切実さは時代が変わっても色彩豊かで、亡くなった者に捧げる力価はあると思う。
そういう思いで、作ってみたいと思います。まずはあの偉大なTeatr Cricot²に負けない劇団を作りました。
どのような挑戦ができるのか、楽しみです。（タニノクロウ）

12月18日(金)▶20日(日)

【ワークショップ】

カントールの舞台の俳優術

◎各日11:00～15:00／17:00～21:00
◎会場＝東京芸術劇場 リハーサル・ルームL
カントールの舞台に立つのは、いわゆる職業俳優ではなく、主にアーティストや他の職業を持つ生活者たちだった。舞台上にはカントール本人が常に存在して俳優たちに指示を出し、俳優たちはカントール作のオブジェや人形と等価に舞台上に配された。「俳優はオブジェである」そして「オブジェは俳優である」というカントールの流儀により、俳優はどのようにあれら驚異の舞台を演じたのか？ Teatr Cricot²の中心メンバーの一人だったリュトウカ・リーバ女史による連続3日間のワークショップ。（昼・コース、夜・コースあり。各定員20名。）

本企画は、20世紀を代表する前衛アーティストであり、20世紀の演劇に多大な影響を与えた、タデウシュ・カントール（1915-1982）の生誕100年を記念して、その作品の映像、自筆ドローイング、タニノクロウによるオマージュ、レクチャー、シンポジウム、ワークショップなど、あらゆる角度からカントールを再検討するものです。本年は、寺山修司の生誕80年でもあり、東京芸術劇場ではその作品を連続上演します。寺山修司と互いに刺激し合う仲であったカントールをあわせて紹介することにより、相対的な視野から彼らの時代の芸術を振り返り、現代に照射したいと考えています。

カントールと 二十世紀演劇の

カントール生誕100年記念

本企画では、カントールの名前を、ポーランド語読みではなく、カントールではなく、カントールと表記しています。彼の演劇を日本に初めて紹介した寺山修司によって使われたこのフランス的な発音が、当時カントールを世界的な演出家として最初に認め、活動の場を作ったフランスを中心に流布していたということ、そして、1982年の初の日本公演でカントールという名前が使われて以来、その名前が多くの演劇人に影響を与え、今日まで定着してきた事実を尊重してのことです。